

会 告

平成十二年度史学研究会大会および総会は、予定通り、十一月二日（木）午後一時より京大会館にて開催されました。

公開講演は秋山進午、礪波護の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終わりました。

近年、東北アジア

考古学研究の進展

秋山進午氏

山陽と湖南

礪波護氏

なお、大会と総会に先立って開催された秋期定例の理事評議員会において、平成十二年度会務報告がなされました。

平成十二年度

史学研究会大会講演要旨

近年、東北アジア

考古学研究の進展

秋 山 進 午

赤峰第一次文化から紅山文化へ

一九三五年の赤峰紅山後発掘調査によって設定された「赤峰第一次文化」は、新中国建国早々、尹達氏によって「紅山文化」と改められた。女神廟、大型積石塚や玉器副葬墓を複合した遼寧牛河梁遺跡は、紅山文化の様相を書き換えた巨大遺跡である。

梁思永氏の予想の如く、一九八〇年代から彩陶流入以前の細石器とジグザグ文土器を主体とする土着文化の様相が明らかにされはじめた。最古の興隆窪文化は前六二〇〇年に遡り、黄河や長江最古の文化と比肩し、続く趙宝溝文化は前五二〇〇・前四二〇〇年で、共に平底厚手で繁華な文様を飾る独特の土器、亜腰石鋏、植刃骨器など、独自の文化様相を形成する。時に周濠を巡らし、丘陵斜面に雛段状に営む住居群は、文化層が薄く短期の使用に止まる。趙宝溝

遺跡報告書が主張する鋏耕農耕や家畜飼養は、少なくとも、より早い興隆窪段階では焼畑や狩猟・採集を主とすることを示唆するものといえよう。

紅山文化に続く後紅山文化では最近、大南溝報告書が刊行されたが、墓地のみの様相であつて経済生活や社会構造の解明はなお今後の課題である。

赤峰第二次文化から夏家店下層・上層文化へ

一九六〇年の赤峰夏家店遺跡の発掘により、赤峰第二次文化の下層文化が発見され、赤峰第二次文化は夏家店上層文化と改められた。夏家店下層文化が注目を集めたのは、大甸子墓地から二里頭文化青銅器と同型の土器や彩画土器が発見されたことによる。報告書の刊行により、詳細分析が可能となったが、装身具以外青銅器類が無く、不自然な側臥位の埋葬などは被支配層の墓のみの可能性を考えたい。魏營子類型文化がそのあとと広がるのが明らかになったのは、近年の収獲の一つである。和尙溝墓から青銅容器と伴出したことによつて、これまでに年代比定の決め手を欠いていた遼寧喀左県の青銅器窖藏と魏營子類型土器との接点が

確認された。

しかし、次の夏家店上層文化は、夏家店下層文化はもとより、その系譜の魏營子文化とは別系統で、その東方の高台山土器文化圏から生まれた。そこへは略左県の青銅器窖藏とは異なり、殷周青銅器のうち農・工具のみが別ルートで伝播している。その基盤の上に「遼寧式銅剣」を中心とする文化が出現したものである。別鑄の劍身・劍柄・劍把頭を組合わせる遼寧式銅剣が、遼西に出現し遼東に及んだことは、遼東の劍が実用品ではなく宝器化していることで証明される。

赤峰寧城南山根遺跡で一〇一号大墓が発見されたのは一九六三年である。大量の青銅器中には西周青銅容器があり、その年代が青銅短劍の年代にも当てはめられてきた。しかし、近年、南山根の南約二〇kmの小黒石溝遺跡からも大墓が発見され、多量の青銅器物中に「許季姜」簋が出土した。小黒石溝からは別に冊命簋（未発表）があり、草原深くの霍林河炭鉱からも「邢姜大宰」簋がある。これら王室重器が北方へもたらされるのは「春秋左氏伝」にみえる、前七世紀後半の度重なる中原諸国と狄との抗争

をおいて他にはなからう。両大墓共、充分発達した北族特有の青銅器物を豊富に含み、その年代を春秋半ば迄引き下げるべきである。同時にその地域特有の矛式劍は狄のものであり、伴出の遼寧式銅剣は先に成立していた東隣の遼寧式銅剣文化圏からの略奪が影響によると考える。

新石器時代の興隆窪・趙宝溝文化はもとより、農耕を受け入れた紅山文化においても、偶像崇拜や特有の玉器など固有の文化を保持している。植刃骨器は後紅山文化にも引き継がれている。二里頭文化や燕の北進などとはありながら、遼寧式銅剣文化はその外側で準備され、成立していった。そしてその影響は朝鮮半島からわが国の弥生文化へ及んでいる。遼寧西部から内蒙古東南部は、まさにそうした東北アジア文化を生み出した中国文明の第三の拠点なのである。

山陽と湖南

磯波 護

一九七〇年代に中央公論社から刊行された（日本の名著）全五十巻のなかで、一人

で一卷を占めた歴史家は、新井白石（一六五七―一七二五年）、頼山陽（一七八一―一八三二年）と内藤湖南（一八六六―一九三四年）の三人だけです。生卒年から分かるように、かれらは、百年に一人の傑出した歴史家と言えます。ここ十年ばかり『京都大学百年史』の編集に参与してきたこともあり、本日は私どもの東洋史学研究室の開祖である湖南が、白石と山陽、とりわけ山陽から、どのような影響をうけたかについて、お話しします。

頼山陽を学ぶのが内藤家の家学で、湖南は十二歳の時に、山陽に傾倒した父の十湾から『日本外史』を習い、この時は長続きしませんでした。翌年には自発的に読みだして熱申しました。それ以後、山陽の絶妙な詩文を暗誦するほどに読み耽り、漢詩文に頭角をあらわしたのでした。秋田師範に入学するや、『日本政記』や山陽増評『唐宋八家文』を買ったといった塩梅でした。しかし一年も経つと、父あての書簡に「お仰せの如く頼先生の学問気魄は中々沾々、自ら喜ぶ者流の企及する所に非ず。学問は兎に角、気魄は千古の一人なるべし。経緯の学に至りては、海の内外、未だ多く

見得ざる所」(全集第十四卷)と述べるように、山陽の気魄に脱帽しつつも、学問については、尊敬の念が薄らいでいました。三十歳代の初年に、新聞に連載の「関西文運論」を補訂した処女作『近世文学史論』を上梓した時も、儒学上の章で「頼山陽、私史を修めて、文名一世を蔽ひ、其の議論白石等先輩に資ること多しと雖も、文気俊逸、步驟度に合し、叙事の妙に至りては前に古人なし。從遊極めて盛んに、関西の文柄、殆んど其の手中に帰せり」(全集第一卷)と書き、山陽の史論が白石らに依拠して独創なきことを喝破しています。

山陽の伝記について最も信頼すべき業績は三十年前に出版された中村真一郎の『頼山陽とその時代』ですが、昨年、著者書き入れ本と執筆に用いた池辺義象訳『邦文日本外史』や梁岳碧冲訳『邦文日本政記』(一九三四年)など十冊ばかりを入手し、後者に検閲による「削除済」のスタンプが捺してあるのに、関心をもちました。今春に刊行された中村の遺稿の大作『木村兼葭堂のサロン』のここかしこにも、頼山陽が姿を現します。

〈日本の名著〉『頼山陽』の解説で頼惟

勳は、川越版『校刻日本外史』は最も普及し、明治三十二年までに十四版を重ね、手間さえかければ今でも刷れるという話を聞いたことがある、と述べていました。その版本数十枚を入手し、有縁の方々に差し上げたりしていますが、その巻十二の豊臣秀吉による発兵伐朝鮮の条と外史氏曰の部分の版木四枚をご覧にいます。

版木といえば、近衛本『大唐六典』の版本が京都大学に保管されており、湖南は「白石の一遺聞に就て」(「先哲の学問」所収、全集第九卷)と題した講演で、『大唐六典』の参考本その他につき、白石が近衛家熙のために骨折った事情を紹介しました。ところが、数年前に、白石が自ら嘉靖本を書写して近衛家熙に献上し、家熙が跋文を清書し、その写本に二十年にわたって考訂をつづけた『大唐六典』の稿本を、京都大学附属図書館で館員の古川千佳が偶然に発見したので、附属図書館の近衛文庫に加えて戴きました。

なお、ここ数年、内藤湖南の著作が中国語に訳されるようになりました。『日本文化史研究』(一九九七年、商務印書館)、また旅行記『燕山楚水』が青木正児の『江南

春』《竹頭木屑》と一緒に『两个日本漢学家的中国紀行』(一九九九年、光明日報出版社)として印行されています。